

幼稚園教師の音楽観と音楽指導観

— 福島県の幼稚園のカリキュラム調査報告(2) —

白石昌子 (保育内容の研究)
平林秀美 (幼児心理学)
大宮勇雄 (幼児教育)

本稿では、福島県の幼稚園の保育内容に関する調査を通じて、園としての保育内容の力点の置き方や、幼稚園教師の音楽観・教材観・指導法・音楽環境について、検討を行った。まず、園としての保育内容の力点の置き方は、公立幼稚園と私立幼稚園の間に違いがみられ、私立の方が複数の領域に力を入れて、園の特色を出そうとしていることが示唆された。次に、音楽観については、幼児の興味を重視する場合と、幼児にとってよいと大人が思うものを与える場合とがあり、それが教材を選択する際に大きく影響している。また、教材選択の基準としては、季節・行事・時期に合うかどうかとも重視されていた。指導法については、幼稚園ではピアノ等の鍵盤楽器の使用が非常に多いが、幼児との関わりの中で限界を考慮すべきであろう。最後に、音楽環境については、幼児が自由に使えるテープレコーダーを備えているかを調査し、幼児の遊びとの関連についてさらに検討を加える必要性を指摘した。

〔キーワード〕 保育内容、音楽観、教材観、指導法、幼稚園教師

I はじめに

本稿は、前稿¹⁾に引き続き平成9年に行った福島県の幼稚園の実態調査のうち、保育内容に関する項目について結果報告するものである。調査の目的等は前稿に述べた通りであるが、保育内容の調査の意図についてここで述べておきたい。

「幼稚園教育要領」は幼稚園の保育内容を5つの領域から示しているが、各園によって個々の内容や構成の仕方はさまざまである。そこで今回は、園全体の方針として力点が置かれている内容と、園の音楽環境および各クラスの音楽活動に関わって質問を作成し、この点に限って保育内容の実態を明らかにすることを意図した。

幼稚園の園生活の中で、音楽が流れている時間の占める割合はかなり大きい。幼児が歌ったり演奏したり音楽に合わせて動いたりといった、保育内容に直結する音楽は言うまでもなく、それ以外にもBGMとしてさまざまな場面で音楽が使用されている。さらに幼稚園における教材選択は、教科書のある小・中学校とは異なり、すべて園または保育者の裁量に任されている。これらの曲はどのような音楽観のもとに選択されるのだろうか。

わが国には他国に比べ、膨大な数の大人が作った子どものための音楽がある。戦後の「子どもの歌」運動は、子どもの歌に高い芸術性を求め、「よい歌詞をよい

メロディーで」という理念で展開された。そして多くの名曲がラジオやテレビを通じて世に広められた。しかし1971年、民放テレビの幼児向けバラエティー番組で放映された体操が幼児の人気をさらったのを期に、この運動は終わりを告げた。この体操はビートのきいた音楽に、大人の流行歌を真似した「あてぶり」をつけたものであった。これを境に、大人が幼児のために作る音楽の傾向が変わったといっても過言ではない。その結果、歌詞やメロディーの優劣を問うよりも、リズムセクションが前面に出た、体の動きをさそうような曲が多く作られるようになった。これは作り手の視点が、「子どもにこそ良いものを」という音楽観から「まずは子どもの興味をひくものを」という音楽観に移った結果とも言える。今回の調査では、こうした視点を考慮しつつ、園や保育者の音楽観や教材の選択について分析していきたい。

次に音楽指導についてであるが、先生がピアノの前に座って伴奏を弾き、子どもたちがそれに合わせて歌っているといった指導形態は、幼稚園ばかりではなく、小学校の音楽の授業においても一般的に持たれているイメージである。しかし保育現場で使用される鍵盤楽器、とりわけピアノに対する批判の声はかなり以前からあがっている。その理由は主にピアノという楽器の形態に起因するのだが、演奏中の保育者が幼児と関われない、あるいは関わりが希薄になることがあげられる。そしてピアノへの批判は、ひいては教員養成

機関での音楽カリキュラムへの批判にもなっている。

こうした批判を背景にして、従来、幼稚園の先生はピアノが弾けることが必須条件のように言われていた状況は変わりつつある。また同じ鍵盤楽器でも、利用法によってはアナログ楽器であるピアノよりも幅広く応用できる、デジタル楽器（シンセサイザーに代表されるような）の開発製作も進んでいる。さらに、前述した新しい音楽観によって作られた曲は、その特長となるリズムをピアノだけで表現しようとするならば、高度な演奏技術が要求される。このような曲を指導する際には、保育者は録音テープやCDなどを利用する必要が生じるであろう。今回の調査は以上のようなことを考慮して、ピアノやテープの使用を切り口に音楽指導の実態を明らかにしようとした。

最後に、幼児の遊びの中に音楽がどのように用いられているかという問題がある。遊びにおける音楽活動としてさまざまな活動が予想できるのだが、今回は幼児が自分で音楽を選んで活用できる機会の有無という視点から調査した。また前稿で明らかになったように、福島県の幼稚園はほとんどが、自由形態と一斉形態の保育の両方を並行して行っている。そこで一斉形態で行われた音楽活動が、幼児の遊びの中にどのように現れるかなどの点も考慮して分析を行いたい。

Ⅱ 方 法

1 調査内容

(1) 園長用

保育内容に関する項目

保育内容の重点、知育のためのワークブックの使用状況、園全体での音楽の使用状況の3項目から成る。保育内容の重点については、「園で、特に力を入れている領域」を、以下の選択肢の中から、あてはまるものすべてに○をつけてもらった。選択肢は、「知育（文字・漢字・数など）」、「英語」,「健康・運動」,「美術（絵画・造形など）」,「音楽（鼓笛・ピアノ・リトミック・音感教育など）」,「その他」,「特になし」の7つであった。

園全体での音楽の使用状況については、一斉の音楽放送の有無、放送する時間帯、選曲の視点、使用する曲名を挙げてもらった。なお、放送する時間帯については、「登園時」,「自由遊びの時」,「片づけの時」,「昼食時」,「降園時」,「その他」の6つの選択肢の中から、あてはまるものすべてに○をつけてもらった。

(2) クラス担任用

保育の内容に関する項目

今回の調査では音楽活動に限定し、保育者の音楽観、教材観、指導法、音楽環境を尋ねた。保育者の音楽観については、音楽活動に対する様々な考え方（14項目、以下に示す）を、「非常にそう思う」,「そう思

う」,「あまりそう思わない」,「まったくそう思わない」の4段階で保育者に評定してもらった。

教材の選択については、実際に子どもが好んだ音楽活動や、教材の選択基準、新しい教材の探し方について回答を求めた。また、指導法については、鍵盤楽器を中心とした伴奏の状況や、音楽テープやCDの使用状況について尋ねた。音楽環境については、子どもが自由に使えるレコーダーやテープの有無と、それに対する保育者の考え方を記入してもらった。

保育者の音楽観

- ① あまり技術的なことにこだわらずに、子どもが楽しめればよい。
- ② 曲の拍子やリズムを叩けることに向けて指導した方がよい。
- ③ 正しい音程やリズムで歌えるように指導した方がよい。
- ④ 子どもがのってこない曲は教材からはずした方がよい。
- ⑤ 子どもが好きなアニメの曲などは遊びの場面で積極的に取り入れた方がよい。
- ⑥ 音楽には教育上好ましい曲と好ましくない曲があるので、選択する必要がある。
- ⑦ アニメなどのヒットソングより、できるだけクラシックを聞かせた方がよい。
- ⑧ わらべうたなど伝統的な遊びを積極的に取り入れた方がよい。
- ⑨ テレビなどで紹介される新しい曲を積極的に取り入れた音楽活動を行う方がよい。
- ⑩ 長く歌いつがれた曲の中にはよい歌がたくさんあるので、子どもが好きだからといって新しい曲を取り入れることはない。
- ⑪ 教師が指導することによって、幼児は音楽を楽しむなくなるので指導しない方がよい。
- ⑫ 教師がことばによって指示を出すのではなく、音楽を流すことによって、生活の流れ（片づけ・昼食など）を作る方がよい。
- ⑬ 曲の選択基準の主たる部分は、子どもが好きかどうかにおいた方がよい。
- ⑭ ピアノなどの鍵盤楽器は、音楽活動を行う上で絶対に必要である。

2 調査対象

福島県の公立幼稚園240園および私立幼稚園158園の計398園。

3 実施時期

1997年1月～2月。

4 調査方法

質問紙法（アンケート調査）による。各幼稚園毎に

調査用紙（園長用，クラス担任用）を送付し，後日郵送により回収した。園長用については，理事長・園長・副園長・教頭・主任のうち1名に回答してもらった。また，クラス担任用については，クラス担任をしている先生全員に回答してもらった。回収率は，前稿に示した通りである。

Ⅲ 結果と考察

1 保育内容の重点

まず最初に，保育内容の中で，園で特に力を入れている領域の集計結果を，表1に示した。公立幼稚園では，「特になし」の回答が最も多く，次いで「健康・運動」であった。それに対して，私立幼稚園では，「健康・運動」が最も多く，「音楽」，「その他」，「美術」の順であった。「その他」の内容については，公立では「自然」，「園外保育」を挙げる場合が多く，私立では「宗教教育」が多かった。全体的にみて，私立幼稚園では園の特色が明らかで，複数の領域に力を入れていることが多いといえる。

次に，知育（文字・漢字・数など）のための市販のワークブックの使用状況については，公立で9.8%，私立で23.0%が使用していた。公立と私立では，若干違いが見られるが，今回の調査では，ワークブックを使用していない園が圧倒的に多いという結果であった。

表1 園で特に力を入れている領域（%）
（複数回答可）

	知育	英語	健康・運動	美術	音楽	その他	特になし
公立	2.94	4.41	32.84	11.76	5.88	10.29	52.45
私立	22.97	14.86	56.76	25.68	35.14	35.14	28.92

2 音楽活動

(1) 音楽観

園全体での一斉の音楽放送の有無については，表2のような結果が得られた。公立では「なし」と答えた園の方が「あり」と答えた園よりも多いが，私立では両者ほぼ半々である。公立と私立を比べると，私立の方が一斉の音楽放送をしている園の割合が多いことがわかる。

次に音楽放送をする時間帯については，表3のような結果である。表中の数字は，前の質問に「あり」と答えた園の数を100として出した割合である。公立と私立を比較すると，差が見られるのは「片づけの時」，「昼食時」，「降園時」の3項目である。特に「片づけの時」の差は大きいと言える。

次に放送をする曲の選択基準および曲名であるが，これは自由記述によって回答してもらった。実際には放送の時間帯によって，選択基準は当然異なると予想

表2 一斉の音楽放送の有無（%）

	放送あり	放送なし	無回答
公立	25.00	74.02	0.98
私立	44.59	50.00	5.41

表3 音楽を放送する時間帯（%）

	登園時	自由遊び	片づけ	昼食時	降園時	その他
公立	37.25	39.22	11.76	31.37	15.69	17.65
私立	30.30	39.39	42.42	18.18	9.09	39.39

される。しかし今回の調査では，時間帯を複数回答した園の中で，個々の時間帯に対応させて選択基準を読みとることが困難な回答もあったので，全体的な分析を行うことにした。

園から挙げられた曲の選択基準は，大きく3つに分けることができる。1つは季節に合わせるといふ基準である。2つめは「幼児が親しみやすく，楽しくなるような明るい曲」といふ基準である。一般に，幼児に適した，あるいは幼児が好むと考えられる曲は，明るくリズムカルで楽しい曲とされている。この基準で記載された曲目も，幼児のための音楽という範疇に入るものが多い。3つめは「落ち着いた雰囲気や幼児の心が安定し，情操豊かになるような曲」といふ基準である。この基準を記載した園の回答には，一般に名曲と言われるクラシックが多く含まれている。中にはクラシックを一日中流すという園もあった。

ここで興味深いのは，2つめと3つめの基準とそれに対応する曲の選び方である。つまり，2つめは幼児が喜ぶ曲として幼児のために作られた曲を選ぶのに対して，3つめは幼児に聞かせたい曲としてクラシックを選ぶ傾向がみられるのである。言い換えればこの2つの基準は，幼児の側からの基準と大人の側からの基準とも言える。そして基準として記載された文章から判断すると，クラシックに対する音楽観は，「幼児にはなじみがない」が，「心の安定をはかる」ために聞かせて，「豊かな感性を育てる」のに適した音楽ということになるだろう。

ほとんどの園は，この2つの基準のうちのどちらか一方をあげている。また，1つめの季節の要素は，この2つの基準とは異なるレベルの規準なので，「幼児の親しみやすい曲」を「季節に応じて」という具合に重複して挙げるようにも思われるが，実際には重複する園の方が少なかった。

保育者の音楽観については，以下のような分析を行った。まず最初に項目反応分析を行い，14項目のうち，保育者の反応が著しく偏った項目（90%以上が同じ方向に反応した項目）を取り除いた。その結果，項目①，⑦，⑩を削除した。次に，残りの11項目について因子分析を行い，2因子を抽出した（表4参照）。第1因子は，項目の②，③，⑭の負荷量が高く，「音程・

表4 音楽観の因子分析結果

	第1因子	第2因子
項目②	0.66519	
③	0.61140	
⑭	0.54447	
⑥	0.43024	
⑧	0.38436	
⑫	0.37112	0.24151
⑩	0.23496	
⑤		0.71252
⑨		0.62133
⑬		0.58023
④		0.47576

リズムの積極的な指導を中心とした従来の音楽活動」、第2因子は、項目の⑤、⑨、⑬の負荷量が高く、「子どもの興味を重視した音楽活動」であった。

この因子分析の結果に基づき、保育者各々の因子得点を求め、公立幼稚園と私立幼稚園および、3・4・5歳の担任の違いが見られるかどうかを検討した。公立と私立の別およびクラス(3・4・5歳)を独立変数、因子得点を従属変数とした2要因の分散分析の結果は、以下に示す通りである。第1因子の得点については、公立・私立の主効果、クラスの主効果および交互作用は有意ではなく、違いは認められなかった。第2因子の得点については、公立・私立の主効果のみが5%水準で有意であった($F=4.89$, $p=0.0283$)。公立(0.05)の方が私立(-0.07)よりも得点が高く、保育者が「子どもの興味を重視した音楽活動」を行おうと考える傾向がある。

(2) 教材観

保育者の教材選択の基準については、担任に自由記述で回答してもらった。ここで言う教材とは個々の楽曲のみではなく、例えば「楽器を作って音を出す」ような活動も含む。

選択基準について記述された内容は、「季節・行事に合った曲」などの保育一般に関わる基準から、「明るい感じの曲」といった楽曲の曲想に関わるものまで多岐にわたるが、次の5つに分類できる。

- 1 季節・行事などが要素となる基準
- 2 遊び・生活が要素となる基準
- 3 幼児の発達・年齢などが要素となる基準
- 4 幼児の興味・関心が要素となる基準
- 5 音楽的内容が要素となる基準

1の「季節、行事、時期に合った」という回答はもっとも多く、全体で46.9%であった。公立と私立を比較すると、5歳では差はないが、4歳では公立41.2%、私立58.4%、3歳では公立30.8%、私立42.1%で、若干私立の方が季節・行事の要素を基準にする傾向があった。2については、「遊びに合った」、「生活に

即した」などの基準で、全体で7.6%あった。公立と私立を比較すると、公立11.3%、私立2.9%で、公立の方が遊び・生活の要素を基準にする保育者が多かった。3は「年齢や発達段階に合った」、「育ちに合った」、「能力に合った」などで、全体で15.1%あり、公立私立の差はほとんどない。

4と5については記載された表現がさまざまに数的処理が困難であったため、回答の多かったものを挙げるにとどめる。4については、「興味のある」、「好きな」、「親しみやすい」、「知っている」、「身近な」、「イメージしやすい」、「幼児の要求に応じて」などが基準として多く挙げられた。

5については、曲想に関わって「楽しい曲」、「リズムミカルな曲」、「明るい曲」などが多かったが、中には「美しい曲」、「情緒的な曲」なども見られた。これらの基準は、前述した一斉放送の曲目選択で用いられた選択基準の言葉とほぼ一致している。リズムやメロディーに関わっては「歌いやすい音程」、「繰り返しがあがる」、「リズムにのれる」、「リズムがとりやすい」、「弾きやすい簡単なリズム」、「リズム遊びができるような」などが多かった。特に「リズム遊びができるような」に代表される、幼児が体を動かせるということを基準に挙げた回答は3歳に多く見られた。また歌詞に関わっては「覚えやすい歌詞」、「イメージしやすい歌詞」、「心がなごむような歌詞」、「わかりやすい歌詞」などが挙げられている。

次に、子どもたちが好んだ音楽教材を5つ、その活動内容とともに挙げてもらった。その結果、ほとんどが曲名として回答されており、全体の曲目数は、実に膨大な数に及んだ。そこで今回は5歳児についてのみ分析の対象とした。

5歳児の担任が記載した教材は、曲目として591曲、題材(リトミックなど)として6つの計597である。この数字は保育場面での教材が、まさに個々の保育者の裁量に任されていることを表すものであろう。とすれば、「子どもたちが好んだ音楽活動」として挙げてもらったこれらの教材は、同時に保育者がどのようなジャンルの曲を保育に用いているかという傾向を知るための資料にもなり得るだろう。

表5は、回答のあった597をジャンルに分類し、その割合を示したものである。曲目の分類基準として考えられるのは、まずテレビなどのマスメディアからの影響の有無である。しかし保育で用いられる童謡・子どもの歌は、そのほとんどが一度はラジオ・テレビなどのマスメディアによって知られるようになった曲である。マスメディアが子どもの歌に与えた質的变化を考慮した、音楽的質による分類基準も考えられるべきではあるが、今回は主として放映時期によって分類した。表中に「幼児向けテレビ」として分類されているのは近年放映された幼児向け番組やアニメ、ヒーロー

表5 教材の分類

ジャンル	曲数	%
童謡・子どもの歌	148	24.79
幼児向けテレビ	89	14.91
非幼児向けテレビ	11	1.84
保育教材	90	15.08
遊び歌	42	7.04
フォークダンス	8	1.34
題材	6	1.01
不明	169	28.31
その他	34	5.70
合計	597	100.00

番組の中で流される曲である。次の「非幼児向けテレビ」に含まれるのは、特に幼児を意識して作られた曲ではないが、テレビなどで触れる機会のある曲である。マスメディアで広まったその他の子どもの歌は「童謡・子どもの歌」に分類した。

回答には、マスメディアによって紹介されるこれらの曲の他に、保育現場が紹介の担い手になる曲も挙げられている。これらの曲を「保育教材」と「遊び歌」に分類した。「保育教材」には、レコード会社や教材会社が幼児のためのオリジナルな教材として製造販売している曲が含まれる。これらは運動会やおゆうぎ会など、行事のためのダンス教材と謳われたものが多く、ほとんどがはじめに述べたような、新しい音楽観で作られている。つまり、幼児が体を動かしたくなるようなロック調やディスコ調にアレンジされた音楽である。「遊び歌」には伝承のわらべうたや、保育現場で伝えられてきた手遊び歌が含まれる。「題材」として分類したのは、曲名としてではなく活動として挙げられたものである。以上のような分類によると、はじめに述べた「子どもの興味」を中心に据えた新しい音楽観を反映した曲が含まれるのは、「幼児向けテレビ」と「保育教材」の部分になる。

表5を見ると、いちばん多く挙げられたのは「童謡・子どもの歌」に分類された曲であることがわかる。また、マスメディアの影響も少なからず受けていると言える。市販のオリジナル教材について言えば、これは毎年新しいものが製造販売されているのだが、これらの教材も多く用いられていることがわかる。さらに、「幼児向けテレビ」と「保育教材」を合わせると「童謡・子どもの歌」を上回り、やはりこれらの曲を幼児が好んでいる、あるいは好むと保育者が考えることがわかる。

次に公立私立それぞれについて、回答の多かった上位10曲をその活動内容とともに表6と表7に示した。前述したように全体の曲数が多いため、公立私立共に1位の「キラキラ星」でも、それぞれの回答者数の1割強という割合である。また活動内容は重複回答を含

表6 公立の上位10曲

曲名	合計%	歌	楽器	動き	遊び・手遊び
キラキラ星	12.93	7	31	1	1
あわてんぼうのサンタクロース	10.27	25	11	2	
さんぽ	9.89	22	8	6	
カレンダーマーチ	9.89	24		4	
貨物列車	8.37			3	19
セーラームーン	7.98	3	1	19	2
Tomorrow	7.22	6	4	15	1
大きな古時計	7.22	18			3
山の音楽家	6.84	6	11	2	
ドレミの歌	6.46	8	15		

表7 私立の上位10曲

曲名	合計%	歌	楽器	動き	遊び・手遊び
キラキラ星	15.15	2	19		
カレンダーマーチ	12.12	14	2	4	
さんぽ	9.85	8	5	3	
畑のポルカ	8.33	11	2	4	
あわてんぼうのサンタクロース	7.58	8	5	1	
大きな古時計	7.58	8			
やきいもグーチーパー	7.58				10
ミッキーマウスマーチ	6.82	1	7	1	
きのこ	6.06	3	1	3	
アイスクリームのうた	6.06	8			

んでおり、実数である。(活動内容が不明な回答は、表中の実数に含まれない。)

「キラキラ星」は公立私立共に楽器で演奏する内容の回答が多い。楽器は鍵盤ハーモニカや木琴などが目立ち、メロディーを演奏する内容であることがわかる。「ドレミの歌」についても同様の傾向がみられた。公立で挙げられた「セーラームーン」や「Tomorrow」は、前述の分類ではマスメディアに影響された曲に含まれるが、これは主に幼児が曲に合わせて動く・踊るといった活動内容になっている。

次に新しい教材の探し方について7つの選択肢を設けて2つまで回答してもらった。2つ以上選択した回答も多かったがすべて有効とした。その結果は「保育雑誌などの教材紹介で」59.3%、「自分でいろいろな曲を聴いてみて」37.5%、「園外研修で」42.8%、「教材会社のPRで」9.4%、「書店で本をさがして」8.2%、「仲間からのクチコミで」39.5%、「その他」4.0%、無回答は1.4%であった。公立私立で大きな差はなかった。

保育者の多くは雑誌の教材紹介、園外研修、保育者同士の情報交換などで自分の教材レパトリーを増やしていることがわかる。前述した教材の部分で市販の保育教材が数多く挙げてきた割には、「教材会社のPRで」見つける保育者は少ないという結果であった。

(3) 指導の方法について

クラスで一斉に歌うときの伴奏をどのような楽器で演奏するかについて、設定した選択肢と回答結果は表8に示した通りである。

結果はピアノを使用している割合が57.9%といちばん多かった。また、私立の方が公立に比べてピアノと回答した割合が若干多い。逆にオルガンの割合は公立の方が私立を上まわっている。ピアノとオルガンの価格の差を考えれば、これは設備の充実の差として捉えることもできる。しかし一方で、移動可能なオルガンの方が保育に使用しやすいという積極的な理由も予測される。デジタル楽器は約1割程度、保育に用いられている。

はじめに述べたように、幼児との関わりの中で問題となるピアノに代わる楽器として、幼児のそばで演奏しながら歌えるギターがしばしば推奨される。しかし今回の調査ではギターと回答があったのは、私立幼稚園のみで極めて少数である。「その他」には、カスタネット、タンバリン、アコーディオン、ウクレレ、珍しいものとしてはオカリナ、ビルマ琴という回答がみられた。楽器伴奏はしないという回答も9.8%みられるが、これはピアノやオルガンと重複回答しているものもあり、歌によっては伴奏をしないこともある保育者を含んでいる。

次に伴奏する頻度については表9の通りである。年

表8 歌の指導に用いる伴奏楽器 (%)

	公立	私立	合計
ピアノ	51.46	66.05	57.93
オルガン	51.46	23.95	39.28
エレクトーン	8.58	3.95	6.53
電子楽器	11.30	12.63	11.89
ギター	0.00	1.32	0.58
伴奏はしない	9.00	10.79	9.79
その他	2.93	4.47	3.61
未記入	0.42	0.26	0.35

表9 楽器伴奏の頻度 (%)

	必ず	だいたい	部分的に	ときたま	使用せず	無回答
5歳	24.05	60.25	7.85	8.61	0.00	0.00
4歳	16.99	58.01	10.58	14.74	0.64	0.00
3歳	19.44	58.33	9.26	10.19	2.78	0.93
混合	37.21	48.84	6.98	6.98	0.00	0.00
全体	21.56	58.62	8.97	10.96	0.58	0.12

表10 音楽テープ等の使用状況 (%)

	毎日使う	ときどき使う	ほとんど使わない	まったく使わない	無回答
公立	9.41	81.59	6.49	0.00	2.51
私立	7.11	68.68	19.47	2.11	2.63
全体	8.39	75.87	12.24	0.93	2.56

齢別に見ると、どの年齢も「だいたい使用する」保育者がいちばん多いが、「必ず使用する」割合は5歳がいちばん多い。そして3歳と4歳は、「ときたま使用する」保育者と「全く使用しない」保育者を合わせると1割以上になる。幼児の年齢によって伴奏楽器の使い方が変化することがわかる。

音楽テープやCDの使用状況の結果については、表10に示した通りである。私立の方が公立よりも使用が少ない傾向がみられる。

またどのような保育場面で音楽テープやCDを使うかという質問には、次のような場面が多く挙げられた。これは、CDなどを「毎日使う」、「ときどき使う」とした保育者に自由記述で回答してもらった。

- ・ダンス、体操、フォークダンス、表現遊び、オペレッタ、おゆうぎ、楽器を使つてのリズム遊びなど、保育者が幼児と一緒に動く必要があるとき
- ・伴奏として
- ・紙芝居、絵本などの効果音として
- ・ゲーム、リレー、なわとびなどのBGMとして
- ・昼食時、昼食後、片付けの時、降園準備の時
- ・運動会、誕生会、おゆうぎ会、およびその練習
- ・自由遊びの中で

最後の自由遊びの中での使い方には、「ごっこ遊びの中での雰囲気づくり」、「一斉で行ったダンスなどを踊りたいという要求が出たとき」、「好きな音楽をきくとき」など幼児の遊びの要求に応じての使用、楽しい雰囲気を作るためのBGMとしての使用、新しく導入する歌をあらかじめ耳慣れさせておくための使用などがある。

全体的にみて保育者のテープやCDの使用場面は、音楽活動そのものを行う場面と、雰囲気づくりのために使う場面があることがわかる。

前者はダンス、体操など保育者が幼児と一緒に動くことによって、動き方や教材の楽しさを知らせるために用いられる。「伴奏として」という回答も、一緒になって歌うと考えれば、この中に含めることができるであろう。表8の「その他」の数字には入れなかったが、歌の指導に用いる伴奏楽器への回答として、テープやCDを挙げた保育者もいた。はじめに述べたように、伴奏楽器としてのピアノは、幼児との関わりの中で点や演奏力量の点で限界を持つ。「伴奏として」テープやCDを使用する保育者は、こうした限界をこれらの機器で補おうとしていると言えるだろう。

一方、雰囲気づくりのために使う場面として多かったのは、昼食時、降園準備などである。自由遊びの場面でも、楽しい雰囲気を作るために使われている。場面に応じて何らかの雰囲気を演出するために使うこのような使い方は、前者の保育内容に直接関わる場面でのテープの使い方に対して、二次的な使用と言えるだろう。回答の中にはこの二次的な使用場面だけが書か

れているものもあった。

ダンスや体操は、自由遊びの中での「踊りたい」という幼児の要求に応じて、遊びの場でもテープが用いられている。運動会やおゆうぎ会などで行ったダンスや体操についても同様のことが言える。行事が終わった後、「遊びの中でおゆうぎ会でやったダンスを踊りたいと要求された時」にテープをかけるという回答も目についた。こうした回答からは、一斉形態の保育や行事で行った教材が、幼児の遊びの中に取り込まれている実態を読み取ることができる。これはテープやCDが保育に有利に機能した結果と言えるだろう。つまり、音楽を再現可能にするテープという「物」があることによって、クラス全体でとりあげた音楽教材が、個々の幼児の遊び道具になり得るということである（それが必要になった幼児の遊びの質についてはここでは問わない）。

そこで次の項では遊び道具としての音楽を、幼児がどのくらい自由に扱える環境にあるかという視点から、遊びの音楽環境を見ていきたい。

(4) 遊びの音楽環境

幼児が自由に使えるテープレコーダー等の有無については、次のような結果が得られた。「あり」と答えたのは公立が87.0%、私立が43.9%である。「なし」と答えたのは公立が12.1%、私立が55.5%である。無回答は公立0.8%、私立0.5%であった。使用頻度については、表11に示した通りの結果である。数字は「あり」と答えた数を100とした割合である。

表11 幼児のテープ等の使用状況 (%)

	毎日 使う	ときどき 使う	ほとんど 使わない	まったく 使わない	無回答
公立	30.05	62.74	4.09	0.24	2.88
私立	7.19	80.84	11.98	0.00	0.00

公立の方が私立よりも高い割合で、幼児が遊びの中で自由にこうした機器を使える環境にあると言える。また年齢による差は私立ではあまり認められないが、公立では5歳が89.7%、4歳が86.6%、3歳が46.1%と、5歳がいちばん多い結果となっている。この差は機器を使いこなせる年齢という意味と、遊びの内容の年齢による差という意味の両方を含んでいると思われる。幼児の使用頻度をみると、「毎日使う」割合は公立の方が高いが、「ときどき使う」を含めると公立私立の差はほとんどない。テープレコーダーがある幼稚園では、幼児が積極的にそれを用いて遊んでいると言える。ただし前述したように、幼児の要求に応じて保育者がCD等を使う保育場面の記述もみられるので、幼児用のテープレコーダーがない場合も、保育者の努力で対応している園があることを推察できる。

その一方でこうした機器について消極的な意見を示す保育者もある。表12は幼児が自由にテープレコーダ

ーを使うことについて「ア. 遊びにとって大切なので、ぜひ必要」、「イ. 音楽はむやみに流すべきではないので、子どもが自由に使うことには反対」、「ウ. テープやレコーダーがなくても、自分で歌って遊べる子どもに育てたい」、「エ. その他」の4つの選択肢を設けて回答してもらった結果である。

表12 幼児のレコーダー使用についての考え (%)

	ア	イ	ウ	エ	無回答
公立	69.25	1.26	5.86	21.34	3.56
私立	30.00	1.84	25.79	35.53	7.63
全体	51.86	1.52	14.69	27.62	5.36

エには、子どもが必要なら使わせてもよいという肯定的な意見と、子どもが要求すれば対応するという意見が多く含まれる。否定的なものとしては、故障を懸念した意見がほとんどである。公立私立で大きな差があるのは、アとウである。

こうしてみると幼児用のテープレコーダーの有無は、必ずしも設備の差としてのみとらえることはできない。環境として整えるか否かは、幼児の遊びがそれらを必要とするような内容かどうかという遊びの中身の問題とも連動していると言える。

保育者がテープやCDを使う場面での記載の中にある「遊びの中で幼児に要求される場面」には、次のようなものがあつた。「踊りたいという要求が出たとき」、「戦いごっこのBGMとして」、「好きな音楽を聴く時」、「劇やペープサートで遊ぶ時」などである。

前にテープがあることによって、幼児が音楽教材を自らの遊び道具にできることについて述べたが、遊びにテープが必要ない場合について、次の2つのことが考えられる。1つは、一斉で行った音楽教材を遊びに取り込むことを、幼児が選択しない場合である。ここでは教材の内容が問題になる。幼児の興味をひかない教材であつたり、幼児のやっている遊びとの接点がない教材であれば、遊びの中に取り込むことはできない。この場合には、一斉での音楽活動と遊びとの関連はなくなってしまふ。もう1つは、そもそも幼児の遊びが上述のような内容を含んでいない場合である。この場合、他の遊びとして幼児がどのような音楽活動を行っているのか、あるいは遊びの中に音楽活動はないのかなどについては、今回の調査では明らかにできなかった。

Ⅳ ま と め

本稿の目的は、福島県の幼稚園の保育内容の実態を探ることであつた。保育内容を、園として力点が置かれている内容と音楽活動に限定し、園や保育者の音楽観、教材観、指導法、音楽環境について調査した結果以下のようなことが明らかになった。

まず、園による保育内容の力点の置き方は、公立幼

稚園と私立幼稚園で差があった。公立は特別何かに力点を置く園が少ないのに対して、私立の方は複数の領域に力を入れて、園の特色を出そうとしている事がうかがえた。

次に音楽観については次のようなことが考察できた。園全体で使用する音楽の傾向は、子どもための音楽かクラシックのどちらか一方である園が多かった。そして子どものための音楽は「幼児が親しみやすく、楽しくなるような明るい曲」であると考えられ、クラシックは「幼児の心を安定させ、情操豊かにする曲」と考えられている。一般的に音楽は情操を豊かにするとされているが、今回の調査によると、クラシックがその対象となる音楽として考えられている。

保育者の音楽観は、私立に比べて公立の保育者の方が「子どもの興味を重視した音楽活動」を行おうと考える傾向がやや高いという結果が得られた。

教材観については、全体の半数近い保育者が教材選択の基準として季節・行事を挙げていた。教材曲としては、近年の傾向である体の動きをさそうような曲が多く保育に取り入れられている。特に3歳児の場合は、体を動かせる曲であることが、選択の基準となっていた。

こうした傾向は、新しい音楽観のもとに、幼児用の音楽教材が豊富に作られたことによって生まれたと考えられる。このような教材を積極的に取り入れることは、保育にあたって子どもの興味を重視しているとも考えられるのだが、一方では、簡単な曲をメロディー楽器で演奏するような活動も、子どもが好きな活動であると考えられている。

前述した子どもの歌とクラシックの音楽観にも見られるのだが、保育者の音楽指導に対する姿勢は「子どもの興味」と「大人が伝えたいこと」の間をゆれ動いているように思われる。つまり、一方で子どもが興味を持つマスメディアの曲やロック調、ディスコ調の保育教材を用いて思いきり体を動かす活動を行い、もう一方でそれらの曲とは接点の見い出せない曲を用いて楽器演奏の技能を身につけさせたり、クラシックを聴かせたりしているわけである。

次に指導の方法としてのピアノの使用についてであるが、幼児の年齢に応じた使い方の工夫を見ることが出来るものの、保育現場ではこの楽器への依存率は高い。ただし、これは教材の側に原因があるとも考えられる。幼稚園で歌われる子どもの歌は、無伴奏で歌うには適さない歌の方が圧倒的に多い。そうした曲を教材とする限り、ピアノ伴奏への要求は減らないであろう。

ピアノに代わるものとして、テープやCDを用いる保育者も見られた。その他にテープやCDは、主に動きの活動に用いられている。また、テープやCDを用いて行った一斉形態での音楽活動を、幼児が遊びの中

に取り込んでいる実態を見ることができた。これはテープがあることによって、一斉形態での音楽活動を遊びの中で繰り返すことができるようになるためだと考えられる。一斉形態での指導が、幼児の遊びを深めるために、遊びのイメージを持たせたり、遊びの糧になるような教材を伝えたり、遊びに必要な技能を身につけるための場としてあるとすれば、テープは一斉形態での音楽活動と遊びを結び付けるのに有効な媒介物となるであろう。

幼児が自由に使えるテープレコーダーを備えているのは、公立の方が私立よりも多い。テープレコーダーを備えている幼稚園では、幼児は積極的にそれを使って遊んでいることがわかった。しかし、幼児用のテープレコーダーを遊びに必要と考える保育者は、公立の方が私立よりも多く、私立にはテープがなくても遊べる子どもに育てたいと考える保育者が多かった。幼児用のテープレコーダーを環境として整えるか否かは、幼児の遊びの内容がそれを必要とするものかどうかという問題と連動している。

今回の調査では遊びの中の音楽活動の実態を知るために、幼児用のテープレコーダーを切り口として調査したが、遊びの内容や質の問題にまで踏み込んで考察することはできなかった。今後、遊びの中で幼児が行う音楽活動の内容や、一斉形態での音楽活動と幼児の遊びの関連について、さらに検討すべきであろう。

〔注〕

- 1) 大宮 勇雄他「保育指導の「計画性」と保育形態の選択—福島県の幼稚園のカリキュラム調査報告(1)—」 福島大学教育実践紀要33号 1997年12月